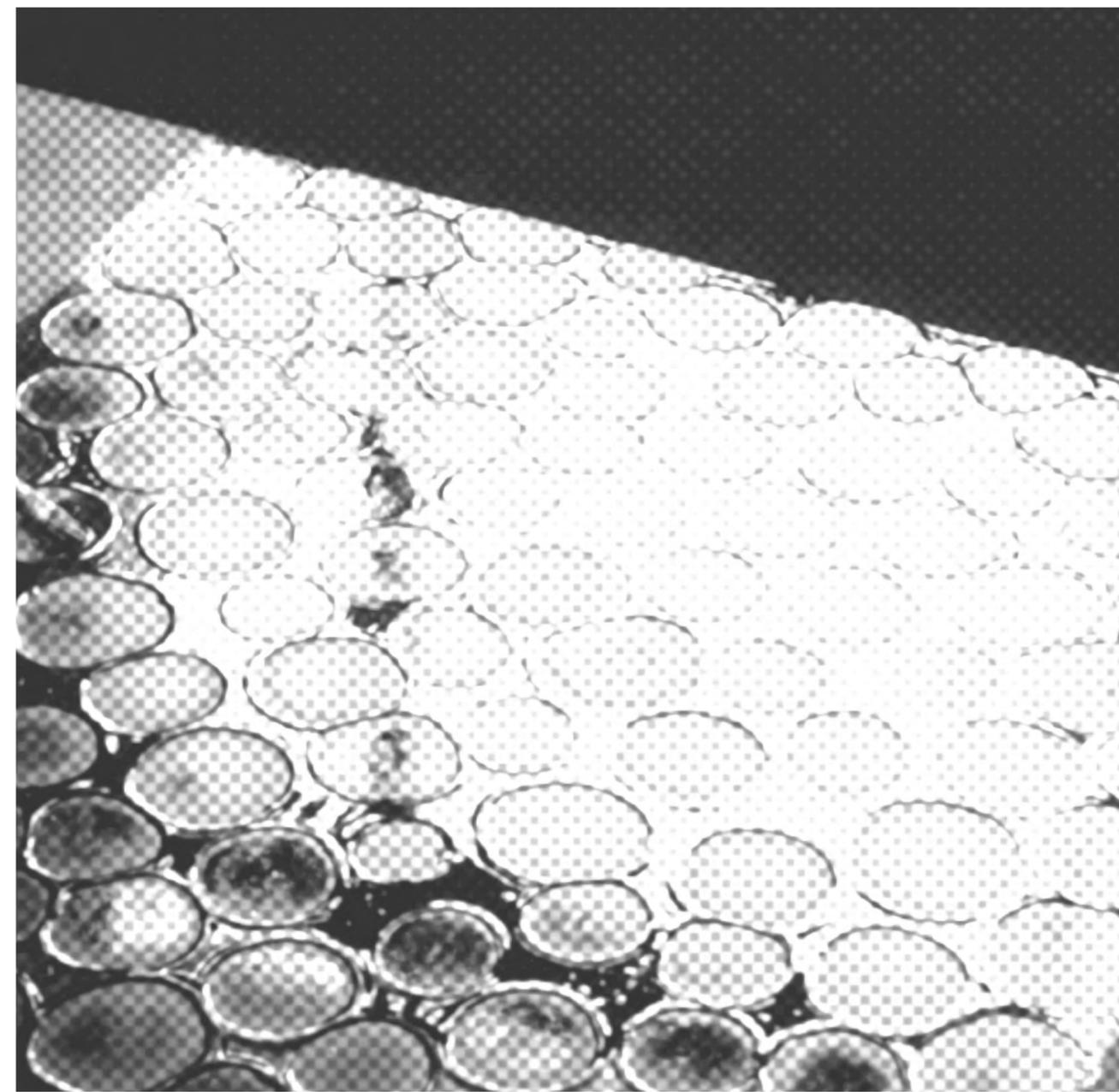


OOO

PAPER

WORKS AND JOURNALS



## Architecture and Design

### What's OOO

A group that creates culture through architecture.  
When designing, we will propose a straightforward idea suitable for the occasion by observing various environments and cultures surrounding the project in a cross-cutting manner and tracing back to the essential proposition.

We consider that the resulting cultural space will be unconsciously comfortable and universally beautiful.

We strive to understand traditional culture, cultivate the modern culture that is there now, and create future culture.

### OOO とは

建築を通して文化をつくる事を目的として設計活動を行うグループです。設計を行うにあたり、プロジェクトを取り巻く様々な環境や文化を横断的に観察し、本質的な命題まで遡る事で、その場に相応しい素直なアイデアをご提案します。そうしてできあがる文化をまとった

空間は、無意識的に心地よく、普遍的に美しいものになると考えています。

培われてきた伝統文化を理解し、今そこにある現代の文化を耕し、これから先の文化を創出します。

TO SUBSCRIBE CALL  
03-6909-9720  
E-mail: ooo.architectunjp@gmail.com

SUBSCRIPTION INQUIRIES  
2-24-2, Asanicho, Nerima-ku  
Tokyo 179-0071, Japan

Issue Date  
Dec. 2021

Printed in  
Nagoya

Editorial Design  
OOO architecture and Hiroaki Funo

# TAKAOKA

location : Chiba, Japan  
 function : restaurant  
 size : 50 m<sup>2</sup>  
 structure : -  
 completion : 2015  
 construction : Kamata builder Co., Ltd.(Tsumoto Kamata)  
 lighting design : moduleX (Shota Hashima, Mariko Hayashi)



# KAIBUCHI

location : Chiba, Japan  
 function : restaurant  
 size : 82m<sup>2</sup>  
 structure : -  
 completion : 2017  
 construction : accomplish Co., Ltd.(Ryosuke Kita)  
 lighting design : moduleX (Katsumasa Asada, Aoi Mastushita)

## 都市を取り込んだ 2つの料亭

千葉市役所に近い住宅地に建つ、2つの高級和食店の計画である。たかおかとかいぶちは、通りを挟んだ斜向かいの1階に位置している。「千葉の食文化を培う」というオーナーの大きな理念のもと、その実践として千葉に新しい風景を生み出す建築群を設計した。2つの店舗には、前面道路と室内の交流を生み出す「露地」や共有の「ハナレ」を計画することで、都市に人の営みを感じられる固有の風景を創出した。また、高級店としての佇まいを持ちながらも入口や窓から垣間見える各店舗の様子は都市景観に潤いを与えている。2つの和食店によって名もない通りに彩りを与える試みとなった。



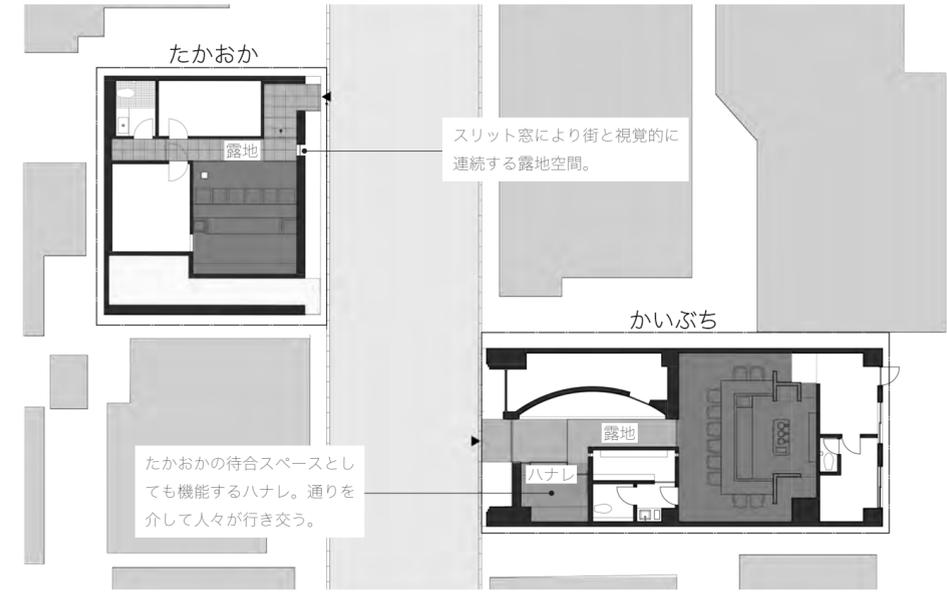
### 輪島塗の大壁

たかおかのカウンターから望む背面壁一面には、輪島塗の技法による漆の溜色本堅地仕上げの大壁を計画した。鮮やかさと穏やかさが同居した深い紅色はシンプルな内部空間の重心となり、店内に色どりと落ち着きを与えている。溜色本堅地仕上げはつやの高い鏡面仕上げが本来であるが、客人の顔が写り込まないように、艶が出ないギリギリのところまで研ぎをとめる特注仕様としている。二次利用を前提とするため、漆壁はパネル化し、接着剤やビスを使用せず押縁で施工した。

### たかおか

関東のみならず日本屈指の鮨店。お魚からお米、調味料、日本酒にいたるまで千葉産にこだわり抜いた食材によって握られる鮨は絶品。JR 総武線「千葉駅」より徒歩8分

<https://tabelog.com/chiba/A1201/A120101/12032785/>



### 露地とハナレとクラ

たかおかとかいぶちには、それぞれの店内に「露地」と名付けた空間を計画している。それらの露地に面して配置されたかいぶちの「ハナレ」はたかおかの待合としても使われるため、公道を私物化するようにオペレーションがなされる。また、公道に面して店内が垣間見えるスリット窓を設け景観上の店内と都市との交流を確保した。特にかいぶちには「クラ」と名付けた取納スペースを露地に面して配置し、日本料理店の美しい食器が陳列された様子が、通りから垣間見ることができる設えとした。このように、店舗建築でありながら都市との関係性をデザインすることで、店内の世界だけで完結するのではなく、ささやかながらも都市と店が関係を持ちながら、食文化を培う店舗建築を生み出せないかと考え設計を行った。

### 漆油滴仕上のカウンター

かいぶちの客席カウンターは、漆油滴仕上げという独特な模様の仕上げとした。キャラクターと趣きをもったこの仕上げは漆を塗った表面に油を水滴のように落とし、油を揮発させることで、くぼみのある仕上げとなる技法である。この技法は担当の漆工房も初めて挑戦した史上初の試みとなった。たかおかの大作作成以来、店主が継続して漆職人との交流をもっていたことにより採用に至った。「本物の仕事」の連鎖は伝統技術の革新にも寄与している。

### 貝淵 卓也

道場六郎郎で修行した店主の名前を冠した日本料理店。店主が確かな目利きで仕入れた旬の食材を使用。美しく盛り付けられた美味しい料理の数々に魅せられる。

HP : <http://www.kaibuchi.com/>  
 080-3084-9290 (予約専用)



### 建材を資産とする

短期間でのスクラップ&ビルトが前提となっているテナント型の飲食店の内装は最低限の仕様となることがほとんどである。テナントビルの建替えや店舗のステージアップなど、経営的にポジティブな状況であっても移転が必要になるケースは多い。この2店舗では将来的な店舗移転時の二次利用も見据えて、上質な漆(輪島塗)を建材として選択した。建材自体に付加価値を与えることで、「捨てられない建材」となり長く利用される、という仕組みである。また、美しくオーセンティックな漆は店内の空気を演出するとともに、その伝統的技術の口承というかたちで店主と客のコミュニケーションが生まれ、食事という体験の一部となる。このように店舗デザインにおける建材を店の資産として捉え設計することで、経営上のみならずマテリアルフローとしても好循環が生まれる店舗設計を試みた。



研ぎの作業



サンプルによる映り込みの確認



一滴ずつ漆を垂らす

### 輪島キリモト

石川県輪島にて、江戸時代後期から明治・大正にかけては200年以上「木と漆」の仕事に携わってきた桐本家。木地業を生業にしながら、多くの力ある職人達と共に木工製品や漆の器、小物、家具、建築内装材に至るまで、木と漆が今に暮らしにとけ込むようなモノ作りに挑戦し続けている。

HP : <http://www.kirimoto.net/>  
 E-mail : [office@kirimoto.net](mailto:office@kirimoto.net)  
 輪島工房・桐本木工所 / 本店  
 〒928-0011  
 石川県輪島市杉平町大百町 70 番 5  
 Tel : 0768-22-0842



## CRAZY WEDDING

location : Tokyo,Japan  
function : office  
size : 400m<sup>2</sup>  
structure : -  
completion : 2015

すべて不揃いの  
やわらかいフローリング

墨田区両国に位置し元繊維工場のビル一棟を本社としていた(株)CRAZYの本社オフィスビルリノベーションプロジェクト(※現在は表参道に移転)。CRAZYは完全オーダーメイドのウェディング事業を軸としたイベントプロデュース企業であり、2012年の創業以来めまぐるしい成長を遂げている。CRAZYの特徴的な取り組みで、毎年恒例の「全社員プロジェクト」という10日間業務をストップして約50人の社員全員参加で何かを行うという企画がある。本リノベーションは2015年の全社員プロジェクトに位置付けられるもので、つまりは社員によるセルフリノベーションを前提とした計画である。特殊なプロジェクトではあるが、約50人×10日間という大量の人工があることに着目した。しかもウェディングの装飾等も社員たちで制作するということなので、センスに富み、かつ手先が器用な人材が50人もいるということである。この人的資源を最大限生かしたデザインにすることが、今回の企画の主旨に沿うとともに空間にも力を与えられると考えた。そこで約1600枚の無垢杉フローリングのエッジを手掛けヤスリで落として、丸みのあるフローリングを床に敷き詰めることを提案した。通常の市場ではそのような手間を加えてしまうと莫大なコストがかかってしまうが、ここでは人件費がタダ

である。丸みのあるフローリングとすることで、空間全体がやわらかくなりオフィスの無機質感を解消できることや、オフィスを土足厳禁の運用に変更することから足触りのいい床にしたいという狙いがあった。出来上がってみると、作業者によってわずかに異なる曲率を持つフローリングは、オフィスにいい味を出している。自分たちの手でつくり上げたということを目に見える形で実感することができ、社員みんなが愛着を持てるオフィスが実現した。

## CRAZY.

ウェディング事業の他、オーダーメイドのケータリングや地域のプロモーションなどの事業を手掛ける。事業のひとつであるCRAZY WEDDINGは、新しいウェディングのあり方を日々更新する業界のトップランナー。本質的で美しくユニークな結婚式を手掛ける。つながりを育むゲストファーストな結婚式場「IWAI OMOTESANDO」も運営する。

HP : <https://www.crazy.co.jp/>



## ブリコラージュを生むためのガイド



大規模かつ多くの“職人”が参加するDIYとなるため、人工や材料のロスがおこらないよう、最低限の施工上のアドバイスをOOOで行った。具体的には、素人でも工程と作業内容が感覚的にわかる工程表ならぬ「工程図」をA0サイズで作成し、全員が施工状況を把握できる環境を整えるためのサポートを行った。その他、フローリングの削りかたや張り方など簡単なコミュニケーションを取りながら施工を進めた。そのようなガイドを設けてあげると、後は手の動くセンスの良い50人の職人たちが、様々な工夫を行いながらテンポ良く工事を進めていった。余ったフローリング材は靴箱の仕上げになり、オフィスの中心には流木による象徴的な大木が立ち上がった。専門家が最低限のガイドを示すことで、個人感性によるブリコラージュを誘発され、Do It Yourselfならではの良さを引き出すことができた。

## IDO

location : Tokyo,Japan  
function : office,atelier  
size : 160m<sup>2</sup>  
structure : -  
completion : 2018  
construction : accamplish Co., Ltd.(Ryosuke Kita)  
lighting design : moduleX (Katsumasa Asada, Aoi Mastushita)  
furniture design : Hiroaki Funo

昔ながらの工場を更新する  
生きるように働く場

株式会社CRAZYがイベントで使用される装飾を制作するアトリエ「IDO」の改修工事である。場所は墨田区の清澄通りに面したビルの1階で、周辺には墨田区らしさを感じられる小さな町工場がいくつも点在している。IDOでは、昔ながらの町工場における、通りに開いた作業場に生活空間が隣接する典型的な構成を引用し、生(産)活感が町へ滲むアトリエをコンセプトに設計を行った。塗装や木材カットなどラフな制作作業を行う場所をドマ空間、縫製や組立などの繊細な制作作業を行う場所をイマ空間として、レベル差を分けて2つの場をつくった。そして、その中心に大きなセンターテーブルを配置し両エリアをつなぐ構成となつて

いる。各部のデザインには和の建築的なボキャブラリーを引用し空間の調子を整えた。合板張りのイマの床は、畳をモチーフとしたパターン張りとし、並べ方を祝儀敷きとすることでウェディングの装飾を生み出す場としての祝祭性の意味を付加したデザインとした。また、収納家具には組木と呼ばれる日本ならではの接合技術を用いし、繊細な支柱と貫を使って棚板を支える構造としている。IDOの中心にあるセンターテーブルは、かつての日本家屋にあった囲炉裏の形態・機能をイメージしてつくっている。囲炉裏には調理、暖房、照明といった多様な機能がおり、それらを通してコミュニケーションが発生していたが、IDOのセンターテーブルでも制作作業、議論、水場、プレゼンテーションといった様々な機能や行為が行うことができる設えとしている。このセンターテーブルを中心

にドマとイマの活動が混ざり合い、さらには、発信まで行う場として設計を行った。墨田の町工場の原風景のように「つくる」と「いきる」が混ざり合い、さらには社会へ発信を行うこれからの時代、ものづくり空間を計画した。



## イマドマ作業台

イマ空間とドマ空間、それぞれの用途に合わせて2種類の作業台を製作した。家具をデザインする際には、構造的な要素、特に裏方的な部分にこだわりたくなる。今回の作業台では、筋交がそれにあたる。脚を支える線の下力持ち。「人」でいう「人」だ。イマ空間の作業台は、作業だけでなくワークショップや展示など多目的に使われるため、レイアウト変更を簡単にできることが求められた。そのため、脚はスチールパイプで軽量にし、ひと回り細い筋交を入れて安定させている。脚を折りたたむことで簡単に高さを変えられる機構も取り入れた。見る角度によって、脚と筋交の重なりに動きが出るようにデザインした。ドマ空間の作業台は、木材加工などのラフな作業で使用されるため、重厚な作りにした。アトリエに入って正面にこの作業台の側面が見える。その際に堂々と鎮座して見えるように、八の字に広がる脚に対して、筋交は鉛直方向に配した。荒々しく使われて、たくましい味のある家具に成長してくれることを願う。これら2つの作業台は、軽量と重厚という相反する印象の家具だが、筋交の入れかたに共通性をもたせることでゆるい繋がりを図った。(布野宏明)



イマ空間作業台



イマ空間作業台折りたたみ状態



ドマ空間作業台

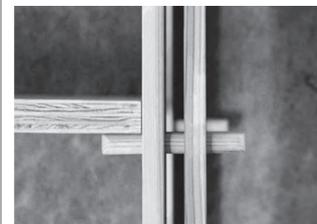
## DETAILS



ラワンベニア畳(縁はタモ材)



太鼓張りの障子戸



組子による可変可能な棚



サンダーでグラデーションをつけたビニルカーテン

## column

空間  
- ヒトとモノとケンチュク -

建築を設計していると、家具からペーパーウェイトにいたるまでどこまでが建築でどこまでが物なのか、不分明になってしまうことはままあることである。「ケンチュク」と「モノ」そしてそれらを使う「ヒト」に対して、どこまで手を広げてどのようにデザインするかは、建築家の永遠のテーマと言えるのではないだろうか。「日々の100 松浦弥太郎著」という本を読んでみると、建築設計の日々のアプローチとは真逆の方向からのアプローチで空間が立ち上がってくるからおもしろい。この書籍は元「暮らしの手帳」編集長のお気に入りの「モノ」を100紹介する書籍である。著者のセンスが惜しげもなく発揮された100の「モノ」たちにパーソナルなエピソードや私感を添えられたエッセイ集となっている。時計やリバーパス 501、村上開新堂のクッキーやマーティンのギターなど多岐にわたるモノを並べられて、ああこれ欲しいなあとか考えながらページをめくっているうちに、そのモノとモノが結び付き、松浦弥太郎という人物のキャラクターが自分のなかに立ち現れてくる。そしてなんとなく松浦弥太郎という「ヒト」が纏う空間の

ようなもののイメージが浮かんでくるのである。さらに話は飛ぶが、数年前、プーライエ(設計鯨井勇)や水無瀬の町家(設計坂本一成)を見学する機会を得た。建築が素晴らしいのはもちろんのだが、空間内に置かれたテーブルや本棚に並ぶモノたちが本当に豊かなことに感銘を受けた。モノとケンチュクの関係が不分明に思えたのだ。プーライエの鯨井さんのデスクには昔のボブマーリーのコンサートの手紙が飾ってあり、水無瀬の町家の吹き抜けに面した書斎には本と共にウッドベースが並んでいる。器であるケンチュクとパーソナリティ溢れるモノ、そしてそれを使うヒトの総体として空間が立ち現れていると感じた。モノとヒトとケンチュクの関係性は不可逆ではなく、インタラクティブで、当然そのプロジェクトのパーソナリティによって相互の関係性の色や比重は異なる。その関係性を意識的に捉え魅力的な空間を設計したいと考えている。



# KAMAKURA HOUSE

location : Kanagawa, Japan  
 function : house  
 size : 101m<sup>2</sup>  
 structure : timber  
 completion : 2017  
 structure design : Takashi Baba structural design office  
 construction : DaidoKogyo Co.,Ltd. (Akira Higashimoto,Junya Amano)  
 lighting design : Katsumasa Asada



## 遠心力とアンカー

鎌倉の丘に立つ、若い夫婦と子供達4人家族のための住宅。江の島海岸から山手へと続く坂道の中腹に位置し、敷地前面道路は極度に急な坂道である。急傾斜地形がゆえ3mほどフロアレベルを上げるだけで海の方面に視界が開けることから、生活の中心となる居間を2階、寝室を1階とした。空と海と山へ、意識が外へと拡がる2階はそ



の風景に向かって素直に開くプランとした。外へと向かう遠心力に対し、意識をつなぎとめるアンカーとして、特徴的なアール形状をもつ階段室を建物の中央に、それに巻きつくように生活空間を外周部に連続的に配置した。遠心力に抗うことなく、ぬるっと連続するアール形状の階段室は、各領域での家族のふるまいに重なり与え、空間に有機的な連続性と奥行きを与えている。と同時に空間と家族をまとめる求心力をもつ。

## トロピカルスイッチ

日本を離れ熱帯や亜熱帯地域を訪れると、時間の流れが明らかに緩やかに感じることがある。暑さに思考が阻害され、予定していた旅程がままならないにも関わらず、ジェフリー・パワの屋外テラスで冷えたトロピカルジュースをいつまでも飲んでいる。鈍い感覚では日差しが遮られただけの最低限の空間が建物の中なのか外なのか、定義することすらできない。ただその心地よい気だるさに身を任せる時間。熱帯のもつ自然なアトモスフィアと一体化した状態。ゴーギャンの描くタヒチのような。

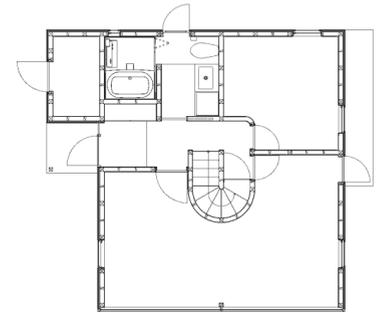
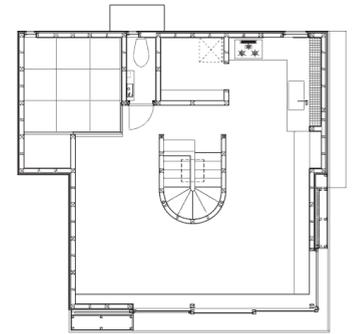
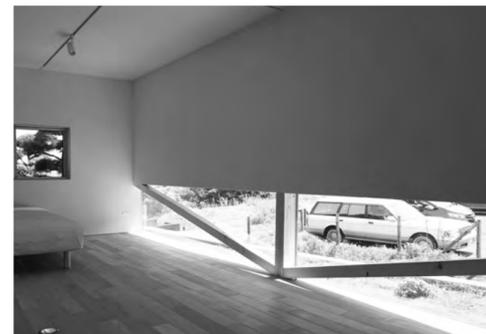
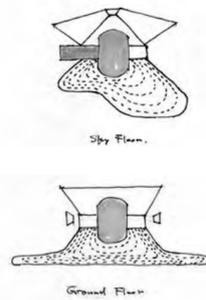
私たちは日常生活でも少なからず自然との融合を求めている。厳しい自然環境の中で生命を実感する、キャンプのそれではない。どちらかと言うと建築という人工物を媒介に人間から自然を迎えに行くような、南国のリゾートに近い。近年屋内外が断絶された環境で潔癖に育てられた私たちも、自然と融合可能な状態を嗅ぎつけるセンサーのようなものを持ち合わせており、ひとたびスイッチを入れると、その心地よさに屋内外の清浄度の差など気にならなくなってしまう。リゾートでない日常でもこのスイッチを入れられるような仕掛けを作りたい。鎌倉の家の二階窓から内外に張り出した緑台はちょうどこれにあたる。屋外との媒介となる緑台がうむ、独特で心地よいこの場所では、花瓶に差した生花や雛人形などの季節ものを飾ったり、読書にふける、文化的な活動が行われている。



## スカイフロアとグラウンドフロア

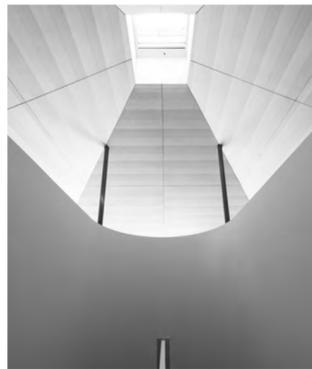
1、2階は平面的にほぼ同一プランで構成している。異なるのはそれぞれ配置される空間と風景に運動させた天井高と開口である。1階は主に寝室と水廻りを計画し、グラウンドフロアとした。天井高さを最小限とした重心の低い空間としつつ、地面と連続する横長の地窓を開けている。地続きの庭を寝室に取り込むことで空間を拡張し、開口と天井高を絞ることで洞窟のような空間となっている。植栽を通して低い位置から入る光は床に反射して、空間を緑に染める。一方、スカイフロアとした2階は、トップライトを中心とした寄棟の屋根形状がそのまま空間の形状となっている。リビングやキッチンなどの各領域を包み込むこの大きな屋根により、家族が部屋のどこにいても気配を感じる一体感のある空間とした。この空間の外周部には出窓やベンチ、デスクなどの建築的エレメントを配置し、各々の心地よい場所でのふるまいが連続するように設えた。

1階と2階で対比的な断面計画とし、それぞれの階で対照的な自然と空間の対話を画策することで、限られた敷地の中でレンジの広い多様な質の空間を計画し、豊かな建築世界を構築した。



## アンカーからの定点観測

この建築のキャラクターは空間のアンカーと位置つけた階段室である。間仕切りと階段としての機能を持つアール形状のこの空間を中心に据えることで、30坪という決して大きくはない住宅に最大限の広さをもたらしている。中心とその外周部という、ともすれば複雑性を奪いかねないリジッドなこの形式は、空間に定点観測的視点を与え、季節の移ろいや地勢の特徴、家族のアクティビティなど、外周部の僅かな変化を増幅して感じることができる装置として機能する。また、この特徴的な壁がそれぞれの階の同位置に現れることで上下階の差異を強調し、空間の質の幅を広げている。この建築のかたちは施主との数多くの対話のなかで自然と生まれてきた。この家の大きく構え、全てを包みこみゆるやかに連続する柔らかな空間はここに住む家族のキャラクターと自然と一致するから面白い。



## column

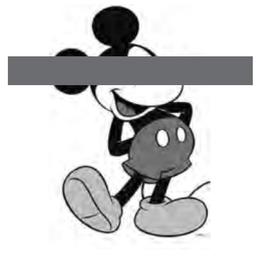
### 建ちあがる"キャラクター"

「最も個人的なことは最もクリエイティブなことだ」

映画監督の巨匠マーティン・スコセッシの言葉である。ポン・ジュノがアカデミー賞作品賞の受賞スピーチで引用した言葉でもある。この言葉にとっても共感するのだが、まさにポン・ジュノの「パラサイト」はこの言葉のエッセンスが多分に含まれた作品だと思う。他人の家の地下に住むという荒唐無稽で非常に特殊性高いプロットの上で、ユーモアや社会風刺など複雑なニュアンスを交えながらリアリティを持ってシーンを描き、積み重ねていくことで、エンターテインメントとして、観客である"私たち"の物語にまで昇華している。ある種神話的とも言えるような普遍性に到達していると思う。是枝裕和の万引き家族にも同じような印象を抱いた。このような特殊性から普遍性までの飛躍の大きさが映画の良し悪しを決めるひとつの尺度であると思う。

さて、建築について話を移すと、私たちが設計を取り組む際、施主のご要望、建築敷地の特性、気候風土など、プロジェクトのパーソナリティをまずは全て受け入れる。ファーストプランは1案に絞らず、複数の案を提示する。そして、そこから出てくるご意見やご要望をニュアンスを汲み取りながらまた検討を積み上げていく。施主や敷地、幾何学と、このようなスタンスでコミュニケーションを繰り返していくうちに、どこかの段階で、そのプロジェクトの"キャラクター"といえるものが建ちあがるタイ

ミングがある。このキャラクターは見つけてしまうと、それは最初からそこに存在しかつ普遍的なもののように感じられるから不思議である。このキャラクターを核として設計をドライブさせていく。キャラクターは設計当初に自分たちでは想像できないものがいつも生まれてくるが、それを生むためには社会的共通解や建築家としての表現だけを追い求めるのではなく、プロジェクトのパーソナルな性格に対し誠実に向き合うスタンスが何より大切なのではないかと思う。このキャラクター探しに好奇心とやりがいを感じ設計を行っている。



## MATSUMIYA

location : Tokyo,Japan  
 function : restaurant  
 size : 19m<sup>2</sup>  
 structure : -  
 completion : 2017  
 sign design,homepage design,accessory design : Yuko Ii  
 construction : accamplich Co., Ltd.(Ryosuke Kita)  
 lighting design : moduleX (Katsumasa Asada, Aoi Mastushita)

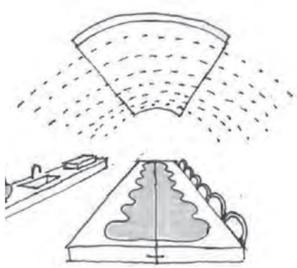


## 料理と会話と建築の一体感

東銀座駅近く、昭和通りから少し外れた閑静な通りに構える小さなおでん割烹の計画。間口一間六坪の間取りのため、奥に小さなバック厨房を設け、調理の仕上げ作業の大部分は6席の客席カウンターの上で行うこととした。日本料理は事前に仕込んだ料理を盛り付けられた状態で提供されることも多いが、食材が口に入れる直前まで眼の前で調理される様子を見せることでライブ感を演出する計画とした。

カウンターはつけ場と客席の仕切りのない設えとすることで、店主と客が1つの大きなテーブルを囲み、親密な関係をつくる。テーブルを包むようなおおらかな造作照明が、さらなる一体感を演出し、食材や調理方法などについて自然と会話が弾む。料理を目で食えること、料理の知を体験することといった、割烹スタイルの食事文化を最大限に享受できる空間とした。

料理と会話と建築の一体感溢れるこのような食空間は店主の人格によって居心地の良さが左右されるが、客との距離感と親密さのバランスの取り方に優れたこの店の店主の才能が遺憾無く発揮される設えとなった。



## 馳走松宮

日本各地の様々な食材やお酒を自ら探しに赴き、納得したものを皆様にお召し上がりいただきたい。この想いから『馳走』との冠がつけられている。皆様と食を通じて語り、その空間を心から楽しんでいただけるお店を目指す。

<https://chisou-matsumiya.tokyo/>  
03-6264-7786



location : Tokyo,Japan  
 function : restaurant  
 size : 19m<sup>2</sup>  
 structure : -  
 completion : 2017  
 sign design,homepage design,accessory design : Yuko Ii  
 construction : accamplich Co., Ltd.(Ryosuke Kita)  
 lighting design : moduleX (Katsumasa Asada, Aoi Mastushita)

シズル感を演出する  
番重什器

フィンランド発祥のドーナツ店がラゾーナ川崎に出店。人通りの多い通りに3畳ほどのテナントを構える計画。低コスト短工期でのプロジェクトであったため、施工方法、資材搬入方法をデザインする必要があった。そこで極力現場作業が発生しないよう、家具を工場製作し、現場で組み立てるだけのデザインとした。陳列するガラス台は毎朝手作りされる工場からドーナツを運ぶための番重を什器としてそのまま陳列する仕組みを提案した。輸送フローとして無駄がなく便利であり、焼きたてドーナツのシズル感も演出することができる。そして催事等での出店も多いことから、今後の店舗のデザインコードをDNAに埋め込むようにこれからの展開を見越したデザインを行った。



生地のアタリがフィンランド

建築とブランディング  
- 建築から小物まで -

食事の愉しみは、その店と出会い食べるまでの一連の体験の中にある。そのため食空間としての建築のマテリアル選定、ディテールには細心の注意を払う。同様に、店のブランドイメージをつくる全てのものに気を配ることができれば、より一貫性のあるイメージをつくることができる。馳走松宮ではロゴマーク、お土産用袋、ホームページに関わることで、3次元にとどまらない空間づくりを行った。



## 松宮のお味噌

アクセサリデザインの一貫として物販用の箱や瓶のデザインも行った。建築完成後も継続的なお付き合いをさせていただいている。



松宮の鴨味噌と山椒漬け  
 最高の出汁を引き立てる最高の調味料として開店以来、人気の鴨味噌と三升漬けを瓶詰めに。お店の味を味わえます。日々の食卓はもちろん贈り物にも最適です。  
 ¥3,240(税込)  
 ※ご注文は店舗までお問合せください。

## Arnolds

location : Kanagawa,Japan  
 function : shop  
 size : 7m<sup>2</sup>  
 structure : -  
 completion : 2020  
 construction : kanaya (Takeshi Yoshimura)  
 furniture design : Hiroaki Funo

「らしさ」の共有と  
どこまでお節介を焼くか

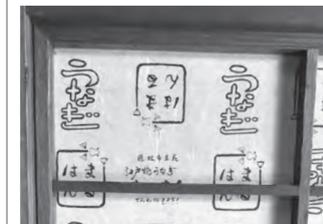
このプロジェクトは顧客に表現したいアーノルドらしさを売手側と共有することから設計を開始した。さらに商品の生産、配送、保存、販売方法といった生産工程リサーチや、日本人のもつフィンランドらしさを分析し、フィンランドのドーナツをいかに日本で展開していくか議論した。このように、ブランディングとして、アーノルド「らしさ」をお店側と設計側で構築したことで、店舗デザインはリアに決定することができ、結果的に短工期でのプロジェクトを実現にもつながった。ポップ、プライスカード、コピー、備品選定、ユニフォームまで提案を行った。当然ながらクリエイティブディレクターとして継続的に関係をもたない限り、建築家がすべての店舗の見せ方をコントロールすることはできない。そのため、アーノルドでは、単

なる内装を超えた、ある枠組みまでをデザインしそこから先は経営の判断でドライブしてもらえよう議論やデザインを意識した。通常の設計業務を超えたお節介焼きではあるが、このような枠組みのデザインが店舗設計する上で必要であると考えている。ブランドアイデンティティの言語化や企業としての社会目的を明確にすることが継続的な経営の持続のために、店舗デザインの提案として不可欠である。

arnold

フィンランドで最もメジャーなドーナツ&コーヒーショップの日本展開。フィンランド伝統的な揚げ菓子であるムンキをルーツにした独特の食感のドーナツは他にない美味しさ。

<http://www.arnolds.co.jp/index.html>



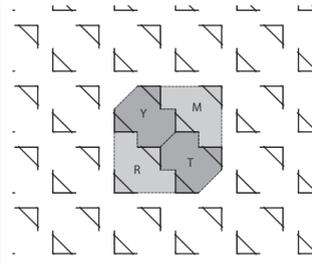
## YUYATAKATE

location : Tokyo,Japan  
 function : exhibition  
 size : -  
 structure : -  
 completion : 2018



## 曼荼羅のような平面計画

アパレルブランドのYUYATAKATE 他3ブランドの合同展示会の計画である。展示会という性質上、ホワイトキューブの限られた世界の中に各ブランドの展示空間をつくらなければならない。そこで鉤型状の什器を曼荼羅のように連続して配置する平面計画とし、拡張性、連続性といったイメージを孕んだ形式とすることで、限られた世界を飛び越える拡がりのある空間を計画した。



## クールな素っけなさ

展示会は短期間の展示のため、搬入搬出の容易さ、自主施工、ローコストが求められた。そこで、ホームセンターに足を運び、材料コストを計上するエクセルを片手に即興的に素材を選定した。現場加工や固定は技術と時間を要するため、ハンガーパイプは予め開けた穴に銅管を引っ掛けるだけにするなどディテールにも配慮した。今回の場合、手間をかけないことが建築の美しさにつながるのだ。

材料やディテールのインダストリアルな即物性と曼荼羅状の配置形式の抽象性とかが相まり、素っけなさど複雑さが共存した計画となった。

## YUYATAKATE

建築を学んだ後、独学で服づくりを学び、2012年よりYUYATAKATEとして活動を開始。

<http://www.yuyatakate.com/>



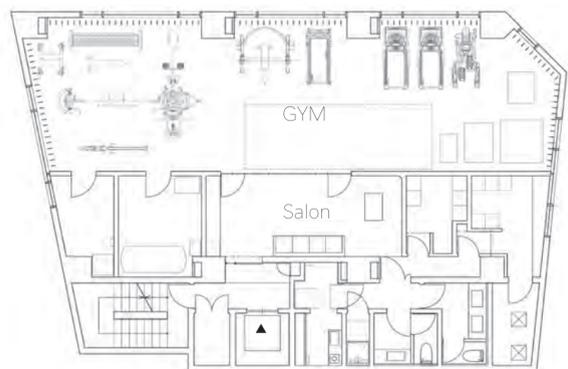


# Brooklyn Fitness Club

location : Chiba, Japan  
 function : fitness gym  
 size : 190m<sup>2</sup>  
 structure : -  
 completion : 2019  
 sign design : Yuko Ii  
 construction : Fujiken Co. (Kenichi Saito, Tomokazu Aono)  
 lighting design : moduleX (Katsumasa Asada, Aoi Mastushita)

## 身体性と知性が同居した 文化的スポーツジム

千葉市中央区の雑居ビルの 200 m<sup>2</sup>のワンフロアに会員制のスポーツジムをつくるプロジェクトである。利用者は会社経営者や実業家などを主なターゲットとしており、ビジネスパーソンの社交場となるような空間にしたいというのが要望であった。BFCでは、プライベートやビジネスとは異なるサードプレイスとして、外界とは切り離され、身体と思考の鍛錬に没入できるサロンのような空間にしたいと考えた。外壁側には黒皮鉄の格子を全面に配置し、外部の情報程よく遮蔽し距離感をつっている。さらに黒皮鉄が鈍く光を反射する様子は空間に重厚感を纏わせつつジムの反復運動に呼応するような一定のリズムを空間に与えている。身体を鍛えることに特化した無機質な空間ではなく、木や左官仕上げの素材感、色気のある間接照明、繊細で格式感のある木ガラス建具など、居心地の良さや空間の柔らかさにも配慮し、知性とマッチョさが同時混在した空間づくりを行った。ところで「ジム」の由来である古代ギリシアの「ギムナシオン」は身体や知性を磨くための場所であり、さらには哲学、文学、音楽の講義やディスカッションなども行われていたそうである。まさに BFC が目指す姿が古代にはあった。仕事終わりにふと立ち寄ると、たまたま出会った人と世間話や情報交換ができた、それが今後の社会的あるいは私的な交流に繋がっていくなど、多様な交流の受け皿として BFC が発展していくことを願う。



## Brooklyn Fitness Club

経営者や会社員などビジネスパーソンを中心のメンバーとしたコミュニティサロン。「経営者が健康になれば、会社も健康になる」をテーマに運営している。

<https://brooklyn-fit.jp/>  
043-307-7410



# ttTB

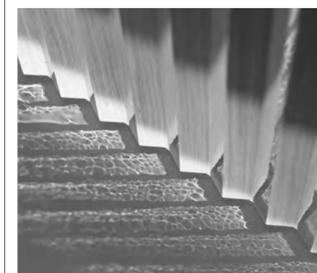
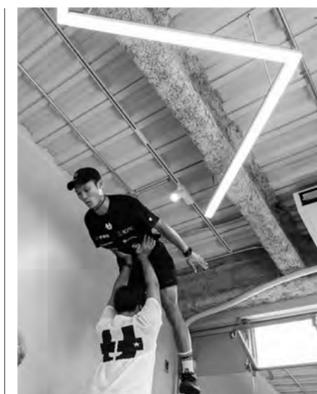
location : Nagano, Japan  
 function : fitness gym  
 size : 36m<sup>2</sup>  
 structure : -  
 completion : 2021  
 construction : Wada builder Co., Ltd. (Takaya Wada)



## スキージャンプは カルチャーだ

「スキージャンプはカルチャーだ」そう標榜するのはソチオリンピック銅メダリストでありプロスキージャンパーの竹内択選手である。ttTB はそんな竹内選手が率いる team taku のトレーニングスペース兼、スキージャンプの魅力を発信する基地である。(ttTB : team taku Training Base) 長野市三輪のテナントビル1階が計画地であり、西側の前面道路に対して全面ガラス張りのオープンな外観であるが、そのガラス面にダイクロミックフィルムを大きく張り込んだ。まるでスキーゴーグルのようなダイクロミックフィルムは、差し込む光、見る角度によって様々な表情を変える。長野の素朴な街並みの中で際立つ特徴的なデザインが発信力につながると考えた。またジャンプ台の勾配に合わせて、フィルムは斜めに切り取られている。これらは一見すると直線的なデザインであるが、フィルムは西日に対する日射制御やトレーニングに

ど、薄い一枚で環境を整える効果も狙っている。プロ選手が真剣にトレーニングをする姿や竹内選手の個性溢れる私物のアイテムやアートが街からは刺激的に映り、まるでショーウィンドウを覗くように行き交う人々から視線が集められている。ttTB では日常風景の中にあえて非日常感を感じさせるデザインを導入させたことが発信力を高めることにつながったと考えている。競技としてのスキージャンプを飛び越え、カルチャーとして開き、発信する基地として相応しい場となったと考えている。これからはスキージャンプカルチャーは ttTB が起点となり発展していく。



## column

### 憧れの建築家

Wolfgang Tillmans の写真が好きだ。彼の写真のモチーフは具象から抽象まで幅広い。そのモチーフたちを一貫する特徴は2つあると思う。1 点目はセクシーさ。エロス、性、生とも言い換えられる。直接的に生々しい表現もあるが無機質なものをモチーフとした写真もなぜかなまめかしい。彼のセクシャリティも多分に影響していると思われる彼の目線のみた生の写真(しゅんかん)だ。2 点目はグラフィカルさ。理性、デザインとも言えると思う。構図がカッコよく、センスが溢れている。何を見せたいかも明快だ。芸術に対して分析的になり過ぎるのは野暮だと思っている派だが、つまるところティルマンズの写真は感性と理性のチューニングがとても良い。感性的な部分も理性的なデザインの部分も、やらしさを感せずスッと入ってくる。人間らしいのだ。一方で建築は生み出す時点で理性は必要不可欠だ。クライアントの要望、法規、コスト etc. 理性的にデザインすべき事象は多岐にわたる。そのような分野において、ティルマンズ的なセクシーさを感じる建築をゾクゾクと生み出しているのはジャンヌ・バルドだと思う。憧れです。

## ttTB

プロスキージャンパー・竹内択が結成したスキージャンプ集団「チーム taku」の練習拠点。2021年7月から一般の人への利用も開始。トップアスリートが取り入れているトレーニングが体験できる。

<https://www.instagram.com/ttTB.2021/?hl=ja>



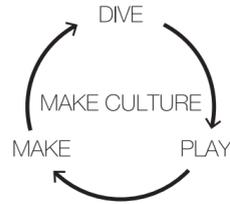
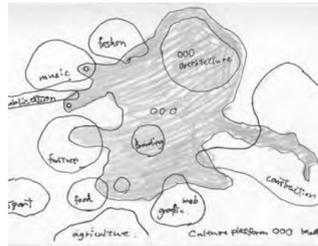
The Vision of **OOO**

# MAKE CULTURE

## MAKE CULTURE

文化とは原始から現在まで人類が積み上げてきた人間の豊かさの蓄積であると私たちは考えています。そして、これから生み出す私たちの建築もその文化を積み上げるものでありたいと考えています。私たちはこのような建築を設計するために、建築という分野にクローズドにならず、建築を建てるという目的に関連する、衣食住、芸術、音楽、映画、ファッションなど様々な分野のプロフェッショナルと、必要に応じてアメンバーのようにチームを成しながら、建築を設計していきたいと考えています。そして、このようなスタンスで生み出される建築は人々の営み総体としての文化を継つたものになると考えています。

OOO は「Make Culture」というビジョンを実現するために「Dive・Play・Make」の3つのスタンスを基に活動を行います。



### OOO デザインプラットフォーム

アメンバーのような流動的に変化するデザインプラットフォームのイメージ。プロジェクトベース、あるいは哲学や思想などの観念でのつながりもあり得るのかもしれない。人と人のつながり方が動的に変化した現代において可能な、新しいチームの成り立ちをめざす。

### Make Culture の循環モデル

Dive・Play・Make を運動のきっかけとした Make Culture の循環モデル。文化を造るという大きなビジョンを実践していくには常に動的であることが重要であると考えている。変化を受け入れ、スマイラルアップしながら運動を持続させていくことが必要である。

### Make Culture のコンセプトビジュアル

上杉本洛中洛外図を参照した、市井の人々の会話や祭事、建築によって都市文化が形成されている様子が芸術的に表現されている絵画である。スケールを横断して各モチーフをつなぐ現象・自然としての雲がアメンバーのように表現されている。一枚の絵にメタとミクロが同居したマスターピースである。そして文化の形成原理は江戸時代から現在にいたるまで時を経て変わらないという証左でもあると感じている。建築をベースに文化を造る上でのたくさんのヒントがこの絵には散りばめられている。



## Profile



佐藤 陽 Yo Sato

1985 福岡県生まれ  
2009 千葉大学デザイン工学科 卒業  
2011 千葉大学大学院工学研究科 修了  
2011-2021 株式会社佐藤総合計画  
2015- OOOarchitecture 共同主宰  
2021- 佐藤陽建築設計事務所主宰



馬場 亮平 Ryohei Baba

1985 長野県生まれ  
2009 千葉大学デザイン工学科 卒業  
2011 スイス・メンドリジ建築アカデミー奨学生  
2012 千葉大学大学院工学研究科 修了  
2015- OOOarchitecture 共同主宰



和田 彦丸 Hikomaru Wada

1986 大阪府生まれ  
2009 千葉大学デザイン工学科 卒業  
2011 千葉大学大学院工学研究科 修了  
2015- OOOarchitecture 共同主宰

## OOO

OOO architecture  
(オー アーキテクチャ)

2015 年設立。「Make Culture」をビジョンに掲げ、建築をベースに幅広い文化の構築を目指す。

Award  
2018 千葉市建築文化賞 優秀賞  
2019 日本空間デザイン賞

tel : +81-3-6906-9720  
mail : ooo.architecture.jp@gmail.com  
HP : https://oooarchitecture.com/

HP  instagram 

## Partners and Collaboration Company

布野 宏明 -Product design-

量産家具の開発をはじめ、特注家具のデザイン・設計も行う。構造や機構を考えることを得意としている。今後は家電分野にも挑戦する予定。

伊井 裕子 -Design-

アトリエ設計事務所、公共デベロッパーを経てプロジェクトの川上〜川下を経験。現在はIoT住宅をはじめ、建築とコンピュータサイエンスの連携を研究中。設計実績に流山おおたかの森小中学校（建築学会賞）。

麻田 勝正 -Lighting design-

空間の文脈、環境解析を通して、そこにしかない場所づくりをコンセプトに照明設計に精進。様々なプロジェクトにて照明計画、特注照明器具設計、照明制御計画の分野で活動中。

mute Furniture

2021年、飛鷹伸彦と高橋修により設立。造作・特注家具を中心に家具の修復まで手がける。  
mail:n.hidaka@mutefurniture.com  
adress: 埼玉県八潮市浮塚 845-5



## on going...

### 神楽坂の医院

location : Tokyo,Japan  
function : clinic  
structure : RC  
architect : Kaneyasu Masuda architect office  
façade design : OOO  
completion: 2022

### 王子の家

location : Tokyo,Japan  
function : house  
size : 80m<sup>2</sup>  
structure : timber  
structure design : Daisuke Kojima  
completion: 2022

### 八重洲の寿司店

location : Chiba,Japan  
function : restaurant  
size : 41 m<sup>2</sup>  
structure : -  
completion: 2023

### 人形町の天麩焼店

location : Tokyo,Japan  
function : restaurant  
size : 40 m<sup>2</sup>  
structure : -  
completion: 2023

### 小金井の家

location : Tokyo,Japan  
function : house  
size : 90m<sup>2</sup>  
structure : timber  
completion: 2022

### 千葉のフィットネスクラブ

location : Chiba,Japan  
function : fitness gym  
size : 180 m<sup>2</sup>  
structure : -  
completion: 2022

### 谷町の美容室

location : Osaka,Japan  
function : hair salon  
size : -  
structure : -  
completion: 2022

and more